● 読書感想文コンクール　中学生の部 ●

入選

角岡　春菜（かどおか　はるな）いずみの森義務教育学校　9 年生

作品名:「ぶれない思い」を胸に

図書:紛争地の看護師

「将来、看護師として、海外で働きたい。」祖父に夢を語った二日後、家に一冊の本が届きました。それが、この「紛争地の看護師」です。

「医療に国境はない。」これは、この本を読んで、私が一番心に残っている言葉です。現代は、ついつい自分が中心となってしまう世の中です。そんな中で、白川優子さんというすてきな女性看護師さんと出会いました。彼女は、国内だけでなく、シリアやイラク、南スーダンなどの紛争地へ「国境なき医師団」として向かいました。いつ爆弾が降ってくるかわからない、命の保障ができない。そんな不安や恐怖と戦いながら、「向かわなければならない」という強い意志を持って、紛争地へと飛びこみました。

二〇一二年九月、白川さんは内戦が起こっていたシリアへと出発しました。MSF（国境なき医師団のことを指す）は中立の立場として、政権に非政府組織としての国内での活動を申請していましたが、承諾されませんでした。そのため、無許可で入国し、活動するしか方法がありませんでした。政府に見つかってはならない、という緊張に加え、攻撃のターゲットとなる医療活動を行うためのプレッシャーは、とても大きかったそうです。

しかし、身を隠しながら活動をしていたのにも関わらず、どこから情報が漏れたのか。拠点をネットニュースに報じられ、その翌日に、政府の爆撃機から空爆されてしまったのです。

現代の日本では、病院に爆弾が降ってくる、なんてことはありえないことでしょう。政府から攻撃を受ける、なんて絶対にないことです。しかし、同じ地球上なのに、医療現場をも戦争になってしまう悲惨な現実があることに、私はバットで殴られたような、強い衝撃を受けました。

私は将来、看護師になって、海外で働きたいと思っています。白川さんのように、シリアやイラクなどの紛争地へ、「国境なき医師団」として行き、多くの命を救うこ

とができる看護師になりたいです。でも、この本を通じて、多くの厳しい現実を知りました。いつ攻撃されるかわからない、いつ死んでしまうかわからない、大切な仲間を亡くすかもしれない。過酷な状況の中で、不安や恐怖に押しつぶされずに自分を保ち続けられるのか、任務を全うすることができるのか、自信がなくなりました。

「あなたがわざわざ行く必要はない」「日本でも救える命はある」たしかにこれは事実だと思います。でも、誰が戦争で苦しむ人々を救うのでしょうか。彼らの悲しみや怒りの叫びに、誰が耳をかたむけて、注目するのでしょうか。同じ人間として、見過ごすことはできない。そのぶれない思いが大切であること、そして何よりも自分の強い支えになると、白川さんから学びました。

十五歳の今の私にできること。それは、いつか夢を実現させたときに、役に立つことを一つでも増やすことです。その事を胸に、今後立ちはだかる難関を、白川さんから学んだぶれない思いを糧に、乗りこえたいと思います。